

第二回

人文知応援大会開催

二〇二二年三月十二日(土)、当フォーラムと大学共同利用機関法人人間文化研究機構との共催で、第二回人文知応援大会「人類の未来を考えるー人文知における先端と古典の融合」が東京の二橋講堂において開催されました。



壇上の大隅氏



右から、大隅氏、齋藤氏、落合氏、南場氏、吉田氏、大林理事

開会挨拶に続いて、大隅良典氏(東京工業大学榮譽教授)より、「科学の健全な発展を願って、半世紀の研究をふりかえって基礎科学とは何かを考える」と題した基調講演が行われました。大隅氏は、純粋な知的好奇心から、自由な発想で楽しみながらオートファジーの研究を続けたことが、ノーベル生理学・医学賞の受賞につながったと、自身の経験をお話になる一方で、効率性や役に立つことを重視し、科学を短期的に評価する傾向や、そのために研究者の挑戦する意欲が低下していること、高校時代から文系と理系を分離する日本の教育システムなどの問題点も指摘。

その上で、科学とは自然科学だけではなく、人類が蓄積してきた知の総体であり、コロナは科学的判断を多くの人ができることの重要性を教えてくれた。知に対して貪欲であろう、科学を文化として楽しむ社会を作ろうと参加者に呼びかけられました。

続くパネル討論には、大林剛郎(当フォーラム理事)のコーディネートのもと、大隅氏に加えて、南場智子氏(ディイエヌエー会長)、メディアアーティストの落合陽一氏、齋藤真麻理氏(国文学研究資料館教授)、吉田丈人氏(総合地球環境学研究所准教授)が参加。「日本では初等教育の段階から好きなこと、楽しいことを取り上げて勉強をまららないものにしていく」(南場氏)、「日本の教育は正解を出すことを求めすぎている。科学の実験は失敗の積み重ねだが、失敗のプロセスを見えるようにしないと、失敗を恐れて挑戦しなくなる」(大隅氏)、「研究者にもコミュニケーション能力が必要であり、学校教育で国語をもっと大事にして欲しい」(吉田氏)など、教育に関する意見が数多く出ました。

また、「個々人が関心を持つていることに適応できる社会を作れば人材は育つ」(南場氏)、二つの価値基準だけで生きていくと他の価値をみとめられなくなる。「歩みひいていろいろなものを見るのが大切。他の分野との

ミックス領域に面白いものが生まれる」(落合氏)、「未知なものに溢れている自然に子ども頃から触れることは、知ることの喜びや楽しさを教えてくれる」(吉田氏)といった意見や、「くずし字を読めない日本人が増える一方で、AIがそれを読んでくれるようになった。テクノロジーの進歩で過去を振り返る新しい視野が生まれる」(齋藤氏)、「人文知を救うのは、コンピュータサイエンスだと思う」(落合氏)、「コロナ禍でオンラインセミナーを始めたら、世界各国からエンターリーがあった。一方で留学生が来日できなくなり、日本をよく知る海外の研究者が減ることは問題」(齋藤

氏)、「ネット社会がいくら進展しても、生身の人間どうしの繋がりににはかなわない。数年後にコロナ世代と呼ばれる若者を生むのではないかと心配」(大隅氏)といった意見が出されました。

パネル討論の終了後、人文知応援大会実行委員長の近藤誠(当フォーラム代表理事)が大会宣言と、ウクライナ情勢に関する付帯決議を読み上げ、拍手をもって採択、第二回人文知応援大会は終了しました。宣言の全文は当フォーラムのホームページで紹介しています。(文責事務局)

人文知

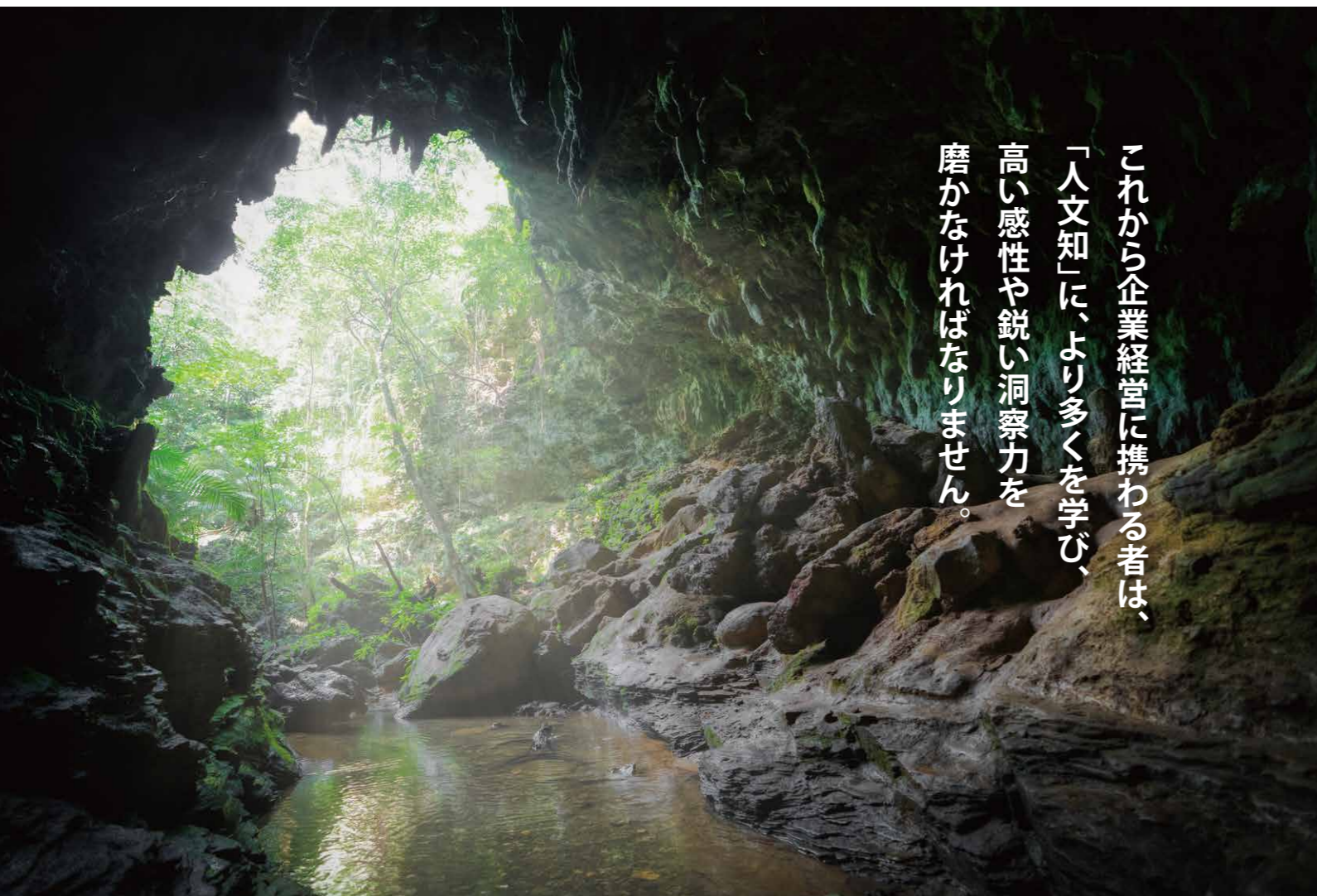
Japan Forum for the Cultivation of Insight from the Humanities

NEWS LETTER

5月

VOL_02

2022年



これから企業経営に携わる者は、「人文知」に、より多くを学び、高い感性や鋭い洞察力を磨かなければなりません。

巻頭エッセイ

「人文知への期待 ~経済界の立場から~」

一般社団法人日本経済団体連合会名誉会長 榊原定征

人文知の本棚／人文知NOW／フォーラムレポート

事務局だより

◇8月27日(土)、28日(日)、倉敷において、第0回人文知夏期学校の開催を検討しています。◇人文知探訪プログラム「古典を感じる会」を毎月1回、開催します。◇詳細は当フォーラム事務局までお問い合わせください。皆さまのご参加をお待ちしております。



応援フォーラム